

夢を買う？

今ドリームジャンボ宝くじが発売中ですが、日本宝くじ協会によると、宝くじの販売額は平成17年度がピークで、当時は1兆1000億円余りを売り上げたそうです。

しかし、その後販売額は減少を続け、平成21年度は9800億円余りと、ついに1兆円の大台を割ったということが、新聞でも報道されています。宝くじも、長引く不況の影響から逃れられないということでしょうか。

私は、一攫千金を夢見て(?) サマージャンボとかグリーンジャンボとかを密かに買ったりしていますが、300円しか当たったことがありません。3億円当たった人が必ずいる筈なのに、何故幸福の女神は私のところを素通りしてしまうのでしょうか・・・。

宝くじは、買わない限り当たりませんが、なまじっか高額賞金が当たりでもしたら人格が変わってしまう恐れもありますから、むしろ当たらない方が平和でいいのではと自ら慰めています。

宝くじは、買い方にも性格が出るようで、家内は、当選金の額よりも当たる確率の方を楽しむということで「ばら券」を買います。一方、私は、「当てるなら最高額でなきゃ」とばかりに「通し券」を買って、家内からは「余り欲をかかないように」と注意されています。

ところで、宝くじの一部は収益金として地方自治体に納められていることはご存じでしたか。

宝くじは、遡れば江戸時代の富籤に行き当たります。この富籤は、神社・仏閣が修理費用を捻出するために発行されたものでした。

一方、宝くじの方は、戦後地方財政が厳しい時代に地方の財政資金を調達することを目的に発行されるようになり、今日に至っています。

話は変わりますが、公営競技と呼ばれている競馬・競輪なども、戦災復興のための資金調達を目的に始められたものです。当初は、地方財政に対しても大

変大きな貢献をしましたが、道営競馬を見ても分かるように、今日では、かえって地方財政の足を引っ張る存在になっています。これも時代の変化というしかありません。

さて、北海道での宝くじの販売額は平成21年度で193億円、収益金は83億円となっていますが、ピーク時と比べると収益金は8億円も減ったそうです。濡れ手に粟の8億円ですから、厳しい財政状況にある北海道にとっては大変痛いことだと思います。

宝くじを購入するということは、いわば社会への貢献という美しい(?)一面も持っているのです。というわけで、私としては、今後も、懲りもせず3千円でささやかな夢を買おうと思っています。 (塾頭 吉田 洋一)